

## 巻頭言 「イースターの喜び」

宇野 元

マルコ福音書によるイースターの朝の出来事は、次のように結ばれています。「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」(16, 8)。

イエス・キリストの復活の朝。女性たちはなお暗闇の中に置かれていた。彼女たちは空の墓を前にして震え、言葉を失っていた。大きな喜びとなる前に。そして、確かな心でイエスにある命を証言するにいたるまでは。

今も、ある意味で、そのような「時」があると言えます。イースター（復活祭）は、日本では桜の開花と前後します。あるいは梅が満開の時期に当たります。美しい四季のなかでもとりわけ匂やかな時、それまで隠れていた命が現れるドラマチックな時と重なります。イエス・キリストの復活について思いをいたすのにふさわしい。しかし今、私たちの心はそのように誘われるだろうか？ ウクライナでの戦争は3年目に入り、さらに新たな暴力の応酬が。豊かな生命の歓喜に囲まれていても、復活の知らせが心に染みるのは困難に思われます。暗闇の中に置かれている。そしてこの事情は、振り返れば、いつもおなじ。女性たちの驚きと恐れ、体験したことを言葉にできない状態はそれを示しているでしょう。そして御使いによる復活の知らせは、彼女たちの思いを超えていました。しかし、言葉を失う状態がいつまでもつづいたというわけでもありませんでした。もし彼女たちが「だれにも何も言わなかった」としたら、イースターの祝いは存在しないでしょう。恐れ、震える三人の女性たち。彼女たちはイエスの復活を知らせる者に変えられます。恐れつつ、けれども、それに優る大きな喜びをもって大胆に。この知らせは21世紀の私たちにまで手渡されています。なんと数知れない証人の群れが先立っていることでしょう。

イースターの出来事は、私たちの理解の枠をはみだしています。春の奇跡的なドラマにたいする感動も、また科学を用いた説明も、イースターの出来事をすべての人の心に染み込ませることはないでしょう。しかし、それにもかかわらず、イエス・キリストの復活の知らせは私たちの心に染み込みます。21世紀の今も、はじめの時も。神の奇跡によって。21世紀の今も、はじめの時も、驚き、恐れ、震え上がる。私たちにふさわしい、人間らしい反応である。自然な反応である。驚き恐れが喜びになる。そして確かな心で語りはじめる。ひとえに奇跡、すなわち神によって。まさに、新しいものを創る神の力が働いています。